

間投助詞「を」から格助詞「を」へ：日本古語と沖縄古語の比較を中心に

山崎, 康弘 / YAMAZAKI, Yasuhiro

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

51

(開始ページ / Start Page)

47

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

1995-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019795>

間投助詞「を」から格助詞「を」へ

——日本古語と沖縄古語の比較を中心に——

山 崎 康 弘

一、はじめに

言語は個人のものでなく社会の所産である、と規定した言語学者ソシュールの言に従えば、言語そのものが社会的なものである以上、社会の変動に連動して言語も変化していくものであるといえよう。沖縄の言語も例外ではない。六・七世紀頃までには、日本祖語から本土に広がっていく日本語と、九州を経て南の島々に渡っていく沖縄語に分岐したであろう、というのが服部四郎氏や外間守善氏(注¹)の見解である。日本祖語からの分岐以後、不断の接触はあったであろうが、いわば封じ込められたままの状態にあった沖縄の言語が独自な変化をみせ始めるのは、アヂ(按司)と呼ばれる族長的支配者が、政治的支配者として活躍し始める十二世紀頃からであると考(注²)えられている。それら多くの按司たちが相互に抗争しつつ覇権を争うが、一四二九年、ついに統一王朝が誕生する。これが沖縄における初めての全島制覇であるが、とりわけ十三世紀から十五世紀にかけてのこの変革動乱の時期は、言

語にとつても大きな変化を促したことは推測に難くない。

ここでとりあげる目的語を示す格助詞「を」は、間投助詞から格助詞へ転じたとするのが通説であるが、必ずしもその変遷過程は明確にされていない。それは多分に、本土の文献時代において、すでに助詞「を」は格助詞としての十分な機能を獲得していたことに起因するといつてもよいだろう。

『おもろさうし』と『万葉集』には、一見すると七く八世紀もの時間的な隔りがある。しかし、沖縄の歴史的発展状況というものを思い起こすと、古代社会から抜け出る十四世紀頃までは、社会が閉鎖的、停滞的であったと同じように、言語の変化も極めて緩やかであったろうと推測できる。その後の歴史のなかで独自の変化が沖縄の言語のなか(注³)に起こるわけだが、その資料となるのが十六世紀初頭に採録された『おもろさうし』であり、十八・九世紀頃を隆盛期とする「琉歌」なのである。よつて、本土の古文獻ではすでにみえなくなっている部分を、『おもろさうし』や「琉歌」を通して捉えられるのではないかと考えている。

二、日本古語における助詞「を」

日本語、特に古代語においては、目的語を示すのに必ずしも格助詞の「を」は必要とされない。むしろ用いないことのほうが多かったように、次の『万葉集』の例でもわかるように、助詞「を」は目的語にとつて不可欠というほどのものではない。

古の人にわれあれやささなみの

故き京を見れば悲しき

(一一三二)

ささなみの国つ御神の心さびて

荒れたる京見れば悲しも

(一一三三)

この格助詞「を」は、強調の意を表わす間投助詞から転じたとする説がもっとも有力である。^(注4)用法の定着にあたっては、中古以降の漢文訓読における「を」の使用が大きく影響したようであるが、上代においてすでに格助詞としても用いられており、間投助詞からの変遷の経緯は必ずしも明確ではない。

その間投助詞は、応答・承諾を表わす感動詞「を」と関係があるとされている。^(注5)『万葉集』からは次のような承諾の返事がその例としてあげられ、感動詞、つまり体言から間投助詞へという変遷が説かれている。

否も諾(を)も欲しきまにまに赦すべき

貌は見ゆやわれも依りなむ

(十六―三七九六)

このような感動を文意全体にまで及ぼそうすると、「を」が文中や文末に置かれるようになる。詠嘆をこめて確認したり、感動の対象を指示強調する、間投助詞への発展である。

夜並べて君を来ませとちはやぶる

神の社を祈まぬ日は無し

(十一―二六六〇)

感動の対象を指示する場合、その対象は、情意の対象や、動作・行為の対象に重なることが多い。

紫草のほへる妹を憎くあらば

人妻ゆるゑにわれ恋ひめやも

(一一二二)

一年にふたたび行かぬ秋山を

情に飽かず過しつるかも

(十一二二一八)

二人行けど行き過ぎ難き秋山を

いかにか君が独り越ゆらむ

(二一一〇六)

本来「を」が、間投助詞としてかなり自由な位置におかれていたことは、ここにあげた「紫草のほへる妹を」の歌をみてもわかる。この「を」が目的語を示す格助詞と断定しづらいのも、ひとえに「妹」が情意の対象であると同時に主格にも成りうるからである。

「秋山を」の歌^(注6)二首を比べてみると、「二人行けど」の歌は格助詞にとるのが普通である。「越ゆ」対象としては上句の「秋山」が想起される。「越ゆ↓秋山」という対応関係は非常に自然で、かつ両者の結びつきは強く意識される。

一方、「一年に」の歌のほうは格助詞ともとれるし、「を」で感動的な休止をおいて間投助詞とすることもできる。事実、諸家の解釈もまちまちである。厳密にいえば「過しつる」対象は「秋山」ではなく、紅葉をめぐる機会を逸して過ごしてしまった時である。「情に飽かず」も、「秋山を」を受ける語というより「過しつる」に係る連用修飾語ととつたほうがよい。よって、ここには「秋山」と直接結びつくような語があらわれてこない。それがこの助詞「を」に対して、目的語を

示すというよりも、詠嘆的な休止を置く間投助詞としての働きを印象づけるのであろう。

こうみてくると、助詞「を」の本来の職能は単なる強調にあつて、そのおかれる位置が目的語の下に落ち着くにしたがつて、単なる強調から目的語表示としての強調、つまり目的格に発展したと考えられる。ただしそう考えた場合、目的語がそれと認識されるのは、助詞「を」による表示の結果ということにはならない。つまり、目的語としての認識が前提にこななければならないのだが、それをすぐさま述語との呼応関係に結びつけてよいものか、問題が残る。途中の経緯はともかく、次のように目的格としての用法が完成されてくる。

山の名と言ひ継げとも佐用比売が

この山の上に領巾を振りけむ

(五―八七二)

以上の考察をふまえ、『万葉集』における助詞「を」の主な用法について形態の上から分類し、沖縄古語の場合のそれと比較する際の参考としたい。

(1) 間投助詞「を」の用法

(A) 体言に接続

明日香川行く瀬を速み早けむと

待つらむ妹をこの日暮しつ

(十一―二七二三)

(B) 用言に接続

(イ) 連体形に接続

妹が家も継ぎて見ましを大和なる

大島の嶺に家もあらましを

(二―一九二)

(ロ) 連用形に接続

心をし君に奉ると思へれば

よしこのころは恋ひつつをあらむ (十一―二六〇三)

(2) 格助詞「を」の用法

(A) 体言に接続

(イ) 動作の対象を表わす

わが背子は仮廬作らす草無くは

小松が下の草を刈らさね

(二―一一)

(ロ) 動作の行われる時や場所を表わす

長き夜を独りや寝むと君が言へば

過ぎにし人の思ほゆらくに

(三―四六三)

春霞立つ春日野を行き帰り

われは相見むいや毎年に

(十一―八八二)

(B) 用言に接続 (連体形に接続)

梅の花折り挿頭しつ諸人の

遊ぶを見れば都しぞ思ふ

(五―八四三)

三、沖縄方言における目的格を表わす助詞

沖縄の古文獻における助詞「を」の用法を検討する前に、現代方言での目的格を表わす助詞の用法について概観しておきたい。方言辞典などには次のように記されている(用例などは省く)。

① 本島・首里方言 (『沖縄語辞典』^(注7)より)

㊦ (助) (文) を。韻文のみで使う。口語では「を」にあたる助詞を用いない。

② 本島・国頭郡今帰仁村 (『沖縄今帰仁方言辞典』^(注8)より)

バ ba (助) を。格助詞。目的をあらわす。ムンと結合し

てしか用いられず、きわめてまれに用いられる。

③宮古島・西原（『琉球の方言』^(注9)より）

格助詞の「を」は、国語の格助詞「を」に対応する。沖縄首里方言などでは、この「を格」は用いられないが、宮古方言では盛んに用いられる。

④宮古諸島・池間島（『現代日本語方言大辞典』^(注10)より）

ウ [ɛ] 長音のあとなどではユ [ɛ] となる。

⑤八重山諸島・石垣方言（『八重山語彙』^(注11)より）

ユ [ɛ] 国語のヲ [ɔ] / [o] に相当するもの。但し目的を表はす助詞は丁寧に云ふ場合の外は、往々これを省略する。

⑥八重山諸島・鳩間島（『琉球の方言』より）

(i) ba (を)、対格を表わす。
(o) ju (を)、文語的表現。

概括すると、沖縄方言では基本的には目的格の助詞を必要としないが、用いる場合は「ユ」がそれにあたる、ということになる。

その一方で、この助詞「ユ」については格助詞とは認められないとする説もある。宮城信勇氏によれば、石垣方言、およびオモロから組踊、琉歌までも含め、すべて「ユ」は目的を表わす格助詞ではなく、強意を表わす間投助詞であるとし、目的格を表わす助詞がなく、「ユ」が強意のために用いられているので誤解されたとしている。^(注12)この他にも、琉歌、オモロそれぞれについて、「ユ」(よ)を目的格の格助詞として認める説と認めない説とがあり、解釈は二分している。^(注13)そこで、琉歌における「ユ」が、目的格の格助詞として機能しているかという点から検討を進めてみたい。

四、琉歌における助詞「よ」

琉歌では「よ」と表記された語は「ユ」と読まれる。これは沖縄方言の大きな特徴の一つである三母音化の影響によるものである。^(注14)ただし、依然として「o」母音を保ったまま「ヨ」と読まれる語もあるが、それは琉歌のなかでは普通「やう」と表記されている。

まず次にあげるのは、「よ」が目的格の格助詞「を」に相当する機能を有すると思われるもののうち、動作の対象を表わす場合である（『万葉集』の用法へ(2)(A)(イ)を参照）。

①格助詞：…表記は「よ」、読みは「ユ」[ɛ]。

②動作の対象を表わす

名に立ちゆる今宵や 月影もきよらさ

思里よさそて 眺めぼしやの (六四)

つれなさや浮世 雨や降らぬやすが

上下も共に 袖よぬらち (二三二)

行きかへる人に 道よ尋ねやり

遠く今帰仁に 忍で行き (八四)

さやか照る月の 影よ恨みたる

人のいことばや なまど知ゆる (一一一)

この「よ」には、解釈の上からみて単なる強調にとどまらず目的語を表示する格助詞としての機能があると思われる。

「さやか照る月の」の歌をみてみよう。まずこの「よ」を間投助詞ととって、感動なり休止なりを与えて解釈すると、

さやかに照り輝く月の光よ、恨んだ人のことばが、今になってよ

うやくその意味がわかったよ。

となつて、「恨みたる」対象は、「人」あるいは「人のいことば」(「いは接頭語」となる。一方、目的格に解釈すると、

さやかに照り輝く月の光を恨んだ人のことばが、今になつてようやくその意味がわかったよ。

となる。月を恨んだ人のことば、つまり月を恨んで歌などを詠んだ人がいたが、その歌の意味するところが今になつてようやくわかった、というものの哀れをしみじみと感じさせる深みのある歌として鑑賞できる。^(注15) もちろん、間投助詞にとつても、

さやかに照り輝く月の光よ、その月を恨んだ人のことばが、今になつてようやくその意味がわかったよ。

と、同じように解釈することもできないが、句の切れ目の上からも大分苦しい解釈といわざるを得ない。

ただし、次のように「よ」が句切れの位置にあるときは、そこに感動的な休止をおいても十分に解釈できるので、間投助詞とも格助詞とも両方にとれる。

庭のささ竹に さらさらと降ゆる

霰白玉よ すくて遊ば

(五七〇)

次に示すのは同じく目的格の用法で、動作の行われる時や場所を示す場合である(『万葉集』の用法(2)(A)(ロ)を参照)。

⑥動作の行われる時や場所を表わす。

幾年よ経ても にごりないぬものや

白瀬走川の 水のかがみ

(二〇九)

挿で嬉しさや 我肝はればれと

箆よ飛び立ちゆる 鳥の心

(二二三九)

『万葉集』の助詞「を」の用法と照らし合わせても、この「よ」が目的格を表わす格助詞として機能していることがわかる。

次に示す「よ」は、間投助詞と思われるものである。ただし、国語の間投助詞(終助詞)の「よ」ではなく、「を」に由来する間投助詞と理解したい。

②間投助詞：：表記は「よ」、読みは「ユ」「エ」。

①体言に接続

日の本よまでも しほらし句立ちゆる

筆に咲く花の 色香そめて

里とわが仲や 木よなれば連理

鳥なれば比翼 いつも共に

幾年よ経ても 色よまさりとて

庭の松竹の もたえきよらさ

②用言に接続

①動詞連用形十十動詞

見る花に袖や 引きよとめられて

月のぬきやがてど 戻て行きゆる

汲みよ始めたる 誠真実の

流れも絶えぬ 許田の手水

②動詞連用形十十補助動詞

唐土按司がなし 数万里の波路

お渡りよめしやうち 挿むうれしや

嶽嶽のおすぢ 寺寺の仏

お守りよめしやうれ 里前つじ上

③は体言の下に間投的に用いられたものである。最後の例などは主

格の位置に投じられたものとも解釈できる。これらはすべて体言を強調するというよりも、二語の間に割って入った感が強い。その意味で国語の間投助詞(終助詞)「よ」に結びつけるよりも、⑥の用法も含めながら、間投助詞「を」につなげて解釈したい。

⑥の動詞の連用形に接続する形式には二通りあって、下に動詞が続くもの(①)と、補助動詞が続くもの(⑦)に分けることができる。

動詞の連用形は名詞形でもあるので、体言とみて目的格の格助詞とすることもできるが、⑦の用法なども考慮すると、下の用言の連用修飾に立つものと解釈して間投助詞としたほうがよいと思われる(『万葉集』の用法(①(B)(イ)・(ロ)を参照)。

またこれらは強調というよりも、音数律の面から八八六音に調えるために「よ」を投じた¹⁶としか思えないものもあるが、それを可能にしているのも助詞「を」の持つ間投的性格であろう。

では国語の「よ」にあたる助詞が琉歌にないのかというと、次の「やう」が間投助詞(終助詞)の「よ」であろう。

表記は「やう」で、読みは「ヨー」となる。歴史的仮名遣いでも「よ」の長音は「やう」などと書くことから、明らかに「ヨ」を反映した表記とみることができる。となれば沖繩の言語が三母音化に進むなかで、「ユ」に転訛したものと、依然として「ヨ」のままであった二種の「よ」があつたことになる。「やう」が「ヨ」母音を保持していることは、両者を区別する意識が働いていたとみるべきであろう。

ただその区別が、語源的に別ということを示すのか、あるいは同源ではあるが、機能的な差異が音韻変化の際に影響を及ぼした結果とみるかである。つまり、間投助詞・格助詞「を」の「よ」が「ユ」に変化し、間投助詞(終助詞)の「よ」が「やう」(ヨー)と長音化したと

みる見方が一つ。もう一つは、語源的には同じ助詞「よ」でありながら、一方は三母音化して「ユ」に、他方はその語勢の強さからか三母音化を拒んで「ヨー」と長音化したとみる見方。ただ後者に解釈した場合、先に「を」に通ずるとして示した間投助詞「よ」は、「やう」と同根とみなければならなくなってくる。

では、その「やう」と表記された例をみてみよう。

用言に接続して命令・禁止を表わし、体言に接続して詠嘆の意などを表わす用法である。

③間投助詞：：表記は「やう」、読みは「ヨー」[ヨ:]。

①用言に接続して命令・願望を表わす

上てども行かば たんであまこまに

岩乗しちをんで 語て呉れやう

(二四九三)

②用言に接続して禁止を表わす

花や咲きすれて 黄葉になるまでも

変るなやう互に あの世までも

(八〇)

③体言に接続して詠嘆を表わす

うばが家とばぬたが 家と隣やれば

今日も見れ明日も見れ かなし里やう

(一三一九)

この他、「よ」と記された中にもこの助詞「やう」に通ずるのではないかと思われるものが二、三あり、表記の上からだけで区別するのは問題がありそうである。¹⁶ただ、少なくとも右にあげた「やう」の用法は、助詞「を」と結びつくものではなく、間投助詞「よ」と機能を同じくするものであると思われる。

間投助詞「を」にからむ周辺は少々問題含みではある。ただここでは、琉歌の助詞「よ」には、動作の対象や目的を表わす格助詞「を」

と、強意を表わす間投助詞「を」の二種類の機能を有すること。助詞「やう」は国語の間投助詞（終助詞）「よ」に通ずるものであること。以上を私見として明らかにしておきたい。

五、『おもろさうし』における助詞「よ」

現代方言から琉歌まで、助詞「よ」（ユ）と国語の助詞「を」を文法的機能の面から関係づけて論じてきた。『おもろさうし』における表記の問題に関してはすでに外間守善氏による詳細な研究があるが、それによれば、音韻論的にみても「を」が「よ」へ転訛したと考えることは十分妥当である。そこで、「よ」が対象を示す格助詞として機能しているかという点を中心にオモロ①をみてみよう。

最初にあげるオモロ①は、絢爛豪華な装いに身を固めた知花按司の勇壮さを讃えたオモロである。

① おとまりかふし

一 ちはな おわる

めまよきよらあんしの

又 ちはな おわる

はくききよらあんしの

又 みはちまき

てちよくまき しまわちへ

又 しらかけみしよ

かさへみしよ しまわちへ

又 といきゝおび

まやし ひきしめて

又 大かたなよ

かけさし しまわちへ

又 こしかたなよ

いかささし しまわちへ

又 ひきやかわきは

うちおけくみ しまわちへ

又 うまひきの

みちやひきのこたら

又 ましらはに

こかねくら かけて

又 まへくらに

てたのかた ゑかちへ

又 するいくらに

月のかた ゑかちへ

(十四—九八六)

身にまとう一つ一つの装束に、対象を示す格助詞は用いられていない（「で示した」）。例外は「大かたなよ」「こしかたなよ」の「よ」であるが、刀という事物への強調とみれば間投助詞であるし、「かけ（いかさ）さし しまわちへ」という述語部分に対する目的語とれば格助詞であろう。どちらに解釈しても歌意にさほどの影響を及ぼさないことから、その判断は恣意的にならざるをえない。

ところが次のオモロ②では、「よ」の解釈が重要になってくる。

② やちよこいよやにかふし

一 くめの世 せきみ

* 「いけくしく はやせ

又 おもいよ せきみ

又 御みや たつ いつこ
 又 まみや たつ いつこ
 又 けおの世かるひに
 又 けおのきやかるひに
 又 あんしおそいかみ御まへ
 又 たゝみきよかみ御まへ
 又 もゝかめは すゑて
 又 やそかめは すゑて
 又 あんしおそいよ はやさに
 又 たゝみきよよ はやさに

（十一—五九三）
 <便宜的に反復句を*で示した。以下同じ>
（注18）

末尾の二句は「よ」の解釈によつてその意味が大きく変わつてくる。間投助詞にとるならば、「国王様よ、この神祭りを賑やかに囃して欲しい」となる。格助詞ならば、「国王様を賑々しく囃して欲しい」となる。「はやさに」の対象が「よ」の解釈で大きく異なるのだが、その判断をこの二句だけに求めるのは難しい。

そこで全体の歌意をたどつてくると、神祭りの庭で威勢のよい若者たちが、いくつもの酒壺を次々と按司（国王）の前に据えている姿がほうふつとされる。とすれば、これは国王を讃えるオモロで、「国王様を賑々しく囃して欲しい（囃しましょう）」という格助詞の解釈が妥当となる。

このオモロ、というよりもこの表現形式の読み解きの難しさは、主体・客体や対象・被対象の関係が、個々の対句内からは読みとれないところにある。主述や対象の関係等が一首全体を通してはじめて明らかになるとすれば、これは助詞「よ」には自らその文法的機能を決定

する能力がないことを示す。目的語がそれと意識されてはじめて、強意の間投助詞に格助詞としての機能が付与されるといえよう。

さて、次のオモロ③では、冒頭で格助詞「が」（「ぎや」）を用いて主体者を明示している。さらにそれを受ける形で、守られるもの（対象）が、「しよりもり」「またまもり」「きこゑあちおそいよ」「とよむあんしおそいよ」と続く。ここでの「よ」は、神女が守り、国王が守られるという主体・客体の関係がはつきりしているため、強調であつても目的格として強く意識される。

③ たいらのとのかふし
 一 首里大きみきや まふら
 とよむくにおそいか まふら

* なさきよもいに

世かけせるむ みおやせ

又 しよりもり まふら

またまもり まふら

又 きこゑあちおそいよ まふら

とよむあんしおそいよ まふら

又 世そわりは けらへて まふら

つみつ「け」は けらへて まふら

さらに次の④のように、同じ対句の中に主体と客体が一緒にうたい込まれていれば、目的語としての意識はよりはつきりとする。当然、助詞「よ」の働きも対象を示すものにとしほり込まれていく。

④ あおりやへかふし

一 きこゑさすかさか

あんしおそいよ ほこて

* あけろとし たゝかす
きみく てつて ふさよわれ

又 とよむ大きみか
たゝみきよ ほこて

〈以下略〉

(十二—七二五)

右のように、同一の対句内で、「きこゑさすかさ」(主語)が、「あんしおそい」(目的語)を、「ほこて」(述語)という、整った構造にまとめられている形式は非常に稀である。というのも、構造的にみて対句には叙述的な要素に欠ける面がある。その点、反復句にはその一つの特徴として、叙述性というものが指摘できよう。

次の⑤はその主体と客体の関係が、反復句の中に簡潔にうたい込まれている例である。

⑤ きこゑ大きみきや

おほつせち おろちへ

* あちおそいよ みまふて
きみくや おほつより かゑら

又 とよむせたかこか

かくらせち おろちへ

又 きこゑあんしおそいや
きみよ ほこりよわちへ

〈以下略〉

(十二—七三二)

反復句で、神女と国王との、守護・被守護という対応関係が明らかにされている。この部分は各対句項の後にくり返されるのであるが、各々の対句部分を意味的に補強し確認すると同時に、内容を重層的なものにする働きもしている。対句項では「きこゑあんしおそいや」き

みよ ほこりよわちへ」(「や」は国語の「は」にあたる係助詞)と続くが、反復句の存在がこの対句部の意味するところをより鮮明にしている。

さらに、次のオモロ⑥では、「よ」と並んで助詞「に」が用いられている。

⑥ あおりやへかふし

一 うらおそいのねくに

* いちへみ さうす けらへて
すてみつよ

おきやかもいに みおやせ

又 とかしきのまくに

(十五—一〇八〇)

反復句で「井戸を造って、浄めの水を国王様に奉れ」と、格助詞「に」の働きで、対象がよりいっそうしほり込まれてくる。

さて、①～⑥まで六首並べてきたのであるが、「よ」が目的格として認識される度合いが徐々に高まってきたことがみてとれたと思う。そこで、これらの歌形についても少し触れておきたい。というのも、①↓⑥へという助詞「よ」の発展過程と、歌形の面からみたオモロの発展過程が、奇しくも一致するからである。

オモロの歌形は、外間守善氏によって、クエーナ形式(用例①)、オモロ形式(用例⑥)、両者の複合形式(用例②～⑤)の三つに分類され、クエーナ形式に比べ、オモロ形式は歌形が新しく整えられた発展的な姿であると考えられている。^(注19)

クエーナ形式からオモロ形式へと発展した要因には、反復句の存在が指摘できる。反復句によってことがらが短く構造化され、対語や対句の冗漫さから抜け出している。ここではそれと同時に、反復句自体

に高い叙述性が備わったことに対して注意を喚起したい。なぜなら、その結果として構文的に整った文が反復句に出現することになり、それはそのまま「よ」を間投助詞から格助詞へと発展させる契機になったと思われるからである。

次に、間投助詞の問題に移る。

『おもしろさうし』の中で、「よ」が間投助詞の「を」として機能していると思われるものには次のようなものがある。

一 おおりのやへかふし

一 あかわりぎや おもろ

あかわりぎや せるむ

おもひぐわす

とひやくさよ ちよわれ

〈以下略〉

(五十二五六)

一 たくしたらなつけかふし

一 あかすくにかねや

なよひちへ おれて

又 くへのしつらいや

又 きみよ みちよろ みやり

(九一四八六)

後の例などは主格の位置におかれたとみられる一方で、詠嘆的な休止をおいているとも解釈できる。その意味では次に示す間投助詞(終助詞)「よ」に近いものがあり、間投助詞「を」として認めるかという点では、いささか決定力に欠くことを否めない。ただ少なくとも次の形式のものは、その用法からみて間投助詞ではあるが、「を」に通ずるものではなく、国語の助詞「よ」であると思われる。

まず、体言に接続して詠嘆の意を表わしている「よ」である。

一 うちいちへはしよりちよわちへがふし

一 首里もりよ

わかおやくによ

あまゑふさよわちへ

又 よかるひの かすよ

きやかるひの かすよ

(五二二一五)

同じく、用言に接続して、命令の意を強調する用法である。

ひやくなうらしろかふし

一 きこゑ大ききや

おれつむか たては

さやはしもはしり

おしあけれよ ちやうのしゆ

たますたり

まきあけれよ すてもの

〈以下略〉

(七三三四九)

琉歌の場合と違って、『おもしろさうし』では、禁止の意を強調する例はみあたらないが、この「よ」は、その用法からみて、国語の間投助詞(終助詞)「よ」とその機能を同じくするものである。

六、おわりに

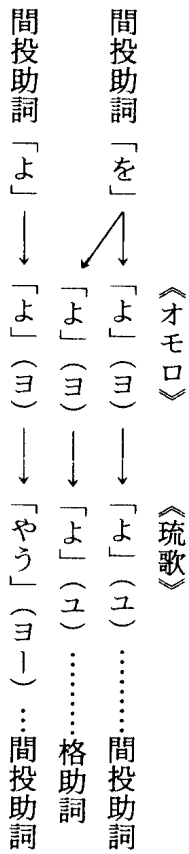
間投助詞から格助詞への変遷の経緯をまとめてみると、まず間投助詞としての「を」が、語調を調べたり、語勢を強めたり、感動を表わすなどのために、文中や文末にその使われる位置をかなり自由に變えて用いられたこと。一方、国語の格助詞は文を構成するうえに不可欠

というほどのものではなく、目的格の場合にも例外ではなかった。その本来格表示のないところへ、「を」が間投的に用いられたのが、目的格へと転じていく契機となったわけである。

その先は、『おもろさうし』において確認した過程が大いに参考になる。オモロの歌形は、クエーナ形式からオモロ形式へと発展するが、それを可能にしたのが反復句の登場にある。それと同時に、反復句の内部ではクエーナ形式にはみられなかった叙述性が高まり、文の構造の中で目的語としての位置関係が明確になるという現象が生じた。つまり、助詞「よ」（＝を）の働きというよりも、文脈の中での対応関係において、目的語という意識が強まったことである。^{注20} その結果、目的語の下につく「よ」は目的格として認識されるようになり、すでに語と語の意義関係において目的語としての格関係を強示するために用いられた。そして、この用法が拡大されるにつれて、格助詞としての純粋性が増していった。その意味では、『おもろさうし』における助詞「よ」は、間投助詞から格助詞への過渡期にあるといえよう。

なお、オモロにおいては、「よ」が対象を示す格助詞へとその機能が増していくにつれて、歌形のほうもクエーナ形式からオモロ形式へ発展していくという相関関係がみとれた。これは両者の発展過程に矛盾がないことを意味するということも付け加えておく。

最後に、『おもろさうし』と「琉歌」にあらわれた助詞「よ」について、本論で仮定した変遷過程を左記のようにまとめしておく。



本文中すでにことわったように、間投助詞「よ」（＝を）には、琉歌においてもオモロにおいてもその機能を整理しにくい部分が内包されている。その点も含め、大方のご批正を仰ぎたい。

テキストには左記の文献を用いた。

高木市之助・五味智英・大野晋『万葉集』日本古典文学大系

(一九六〇年、岩波書店)

島袋盛敏・翁長俊郎『標音評釈琉歌全集』(一九六八年、武蔵

野書院)

外間守善『おもろさうし』(一九九三年、角川書店)

注記

注1 服部四郎『言語年代学』即ち『語彙統計学』の方法について

(『言語研究』二十六・二十七号、一九五四年)

注2 外間守善『沖繩の言葉』日本語の世界9(一九八一年、中央公

論社)。第四章「歴史的にみる沖繩の言葉」

注3 外間前掲書(注2)

注4 間投助詞から転じたとする説には、佐伯梅友「助詞『を』につ

いて」(『文学』一九四二年十月、岩波書店)、松尾拾「客語表示

の助詞『を』について」(『国語学論集』一九八〇年、岩波書店)、

此島正年『国語助詞の研究』(一九七三年、桜楓社)などがある。

注5 松村明編『日本文法大辞典』(一九七一年、明治書院)など。

注6 この二首は、佐伯梅友が、「を」が格助詞か間投助詞かいずれか

一方に割り切ることのできない例としてあげているものである。佐伯前掲論文(注4)参照。

注7 国立国語研究所編『沖繩語辞典』(一九六三年、大蔵省印刷局)

注8 仲宗根政善『沖繩今帰仁方言辞典』(一九八三年、角川書店)

注9 『琉球の方言』8(一九八三年、法政大学沖繩文化研究所)

注10 平山輝男編『現代日本語方言大辞典』(一九九三年、明治書院)

注11 宮良當壯『八重山語彙』(『宮良當壯全集』8 一九八〇年、第一書房)

注12 宮城信勇「沖繩・石垣方言の助詞『ユ』」(『沖繩文化』七六号、一九九二年)

注13 琉歌の「よ」については、阿波根朝松『琉歌古語辞典』(一九八三年、那覇出版社)では間投助詞ととり、清水彰『標音校注琉歌全集総索引』(一九八四年、武蔵野書院)ではそこに格助詞も認めている。オモロに関しては、中原善忠・外間守善『おもしろさうし辞典・総索引』(一九七八年、角川書店)では格助詞の機能も認めるが、高橋俊三『おもしろさうしの国語学的研究』(一九九一年、武蔵野書院)では間投助詞とする。

注14 外間守善『沖繩の言語史』(一九七一年、法政大学出版局)

注15 島袋盛敏・翁長俊郎『標音評釈琉歌全集』(一九六七年、武蔵野書院)の解釈を参考にした。

注16 例えば次のような琉歌の「よ」である。

あがり打ち向かて 飛びゆる綾蝶

まづよ待てはべる いやりもたさ (四一二)

思切やりをても これまでよとめば

出ち立ちゆるきはや 袖の涙 (五八〇)

『万葉集』で副詞や助詞に接続する「よ」は、国語の間投助詞「よ」である。とすればこの琉歌の「よ」もそう解釈すべきかもしれないが、現時点では保留としたい。

注17 外間前掲書(注14)。「おもしろさうし」の仮名遣いと表記法

注18 反復句の弁別については、波照間永吉「オモロ反復句索引へ末尾句引き(試案)」(『沖繩芸術の科学』第三号 一九九〇年、

沖繩県立芸術大学)を参考にした。

注19 外間守善・西郷信綱『おもしろさうし』日本思想大系18(一九七二年、岩波書店)。「おもしろ概説」

注20 松村前掲書(注5)。「を」の項に、客語表示は文脈の中でなされることで、「を」の表わすことではないという指摘がある。

付記

本稿は、「法政大学国文学会大会」(一九九四年七月九日)での研究発表をもとにしている。

学恩を受けました外間守善先生に感謝申し上げます。

(やまざき やすひろ・文学部兼任講師)